

「お前の神はどこにいる」への答（2024.4.21）

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、  
わたしもまたいつもその人の内にいる。」（ヨハネ 6:56）

旧約の詩人は呻きます。「昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。人は絶え間なく言う。『お前の神はどこにいる』と。」（詩 42:4）この詩人は神に望みを置いていたのでしょうか。しかし、人々はあざけるのです。「お前の神はどこにいる。お前のような罪人を助ける神などいるはずがない」。しかしこの詩人は、涙に明け暮れながらもなお思い起こすのです。「喜び歌い感謝をささげる声の中を、祭りに集う人の群れと共に進み、神の家に入り、ひれ伏したことを。」（詩 42:5）そして、自らを励ますのです。「神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう。『御顔こそわたしの救い』と。私の神よ。」（詩 42:12）

上掲の御言葉はヨハネの聖餐制定語と言われます。このみ言葉にはイエス様の固い決意が込められています。驚くべき神秘が約束されています。それは聖餐にあずかる者の内にいつもイエス様が共にいてくださる、ということです。イエス様がその人の内に現臨される、ということです。じっくり味わうと、本当に深い慰めのみ言葉です。そして、このみ言葉は信じる者を救いの確信に導きます。全き贖いの子羊であり復活のイエス様が内において下さる。だから、全き罪の赦しと永遠の命を信じることができるのです。詩編の記者が「御顔こそわたしの救い」と告白した御顔とは、私達にはイエス様です。「わたしの神はイエス様です。私の内におられます！」これが「お前の神はどこにいる」への答です。

2歳の息子を持つ母の証しです。保育所に送り届けるたびに泣かれるので、大急ぎで保育所を後にしていたが、ある日の朝、ふと何かが目に留まります。なんと息子が一生懸命に手を振っているのです。嬉しくて職場の人に話し、翌朝、先生に伝えます。すると、もう何か月もそうしていたというのです。この経験から、自分が神様の愛のサインを何回見逃してきたのだろうか、と考えさせられたというのです。

2024年度の横手教会は年度目標を「洗礼・聖餐の恵みに立つ教会」と掲げました。洗礼・聖餐の恵みとはキリストがわたしたちの内に現臨されることです。ともするとこの恵みに無頓着になっていないでしょうか。こんな驚くべき恵みを忘れて無駄にしていないでしょうか。いつも自覚して、この恵みにしっかり立って歩む横手教会でありたい。

